

# 棄老説話の起源

井 本 英 一\*

アヒカルは、アッシリア王センナヘリブ王の大臣であった。彼は60歳になり、60人の妻妾と60の居館を所有したが、息子に恵まれなかった。彼は神々に願かけをし、子宝に恵まれるように祈った。しかし、神々は彼の願いに応えないで、甥のナダンをも息子代わりに養育するよう勧めた。

アヒカルはそのとおりにし、精魂込めて甥を教育したが、ナダンは非行にはしり、アヒカルの財産を浪費し、あらゆる罪を犯した。ナダンは、アヒカルにこのことを詰問されたのを恨み、彼を亡き者にしようと企んだ。ナダンはアヒカルを、王に対して反逆の心をもっていると訴えた。王はアヒカルに死刑を宣告した。アヒカルは、死刑執行人に、自分の代わりに、死刑囚の奴隷を処刑させ、妻に匿ってもらう。人々は、アヒカルはもう死んだと思った。

賢者アヒカルの死の報せが、センナヘリブの敵であるエジプト王ファラオの耳に達した。エジプト王は、センナヘリブに、天と地の間に宮殿を建てるようにという難題を課し、もしセンナヘリブがこれに成功すれば、エジプトの国家収入を3年間にわたってセンナヘリブに支払い、もしセンナヘリブが成功しなければ、同じことをエジプト王にするようにとやってきた。

センナヘリブ王の大臣たちの誰ひとり、エジプト王の難題に応える者はいなかった。ナダンについていえば、それは論外であった。王は苦境に陥り、アヒカルを処刑したことを後悔した。そのとき、死刑執行人が、アヒカルが

---

\* 本学文学部

キーワード：アヒカル物語とおばすて伝説、棄老と老人の知恵、老人を匿う地下室、地下室と墓室、老人を殺して食う習俗

生きていることを王に告げた。王は喜び、アヒカルを赦免し、エジプトに送った。アヒカルは、巨鳥の背に乗って空中に飛び上がり、地上にいるエジプト王に、石材を空中に運び上げるように要請した。エジプト王は負け、センナヘリブに年貢を送りつづけることになった。アヒカルがアッシリアに帰還すると、王は彼をもとの役職につけ、彼の甥ナダンに彼を引き渡した。彼はナダンを厳しく責めたので、ナダンの体は皮袋のように膨れあがり、破裂してしまった。

この話は『千一夜物語』の補遺に収録された、「アラディンと不思議なランプ」や「アリ・ババと40人の盗賊」などと同じように、夜話番号がつかない物語で、シリアのキリスト教徒の間で流布していた話が、アラビア語で伝えられたものらしい。アラビア語の原文は、F.C.コニベア、J.R.ハリス、A.S.ルイス『アヒカル物語——アラム・シリア・アラビア・アルメニア・エチオピア・古トルコ・ギリシア・スラブ語版』（ケンブリジ、1913）の中に見ることができる。アラム語版「アヒカル物語」は、ナイル川の第1急流の下流にあるアスワンの沖にあるエレファンティネ島で出土した多くのパピルス文書の中の1つである。これらの文書は、紀元前5世紀のペルシア帝国の盛時、その版図にあったエジプトに駐留したユダヤ人守備隊のものであった。文書の中には、ペルシア帝国のダリウス大王のベヒスタン碑文のアラム語訳もある。アラム語訳は、ベヒスタン碑文のアッカド語訳からの重訳である。「アヒカル物語」のアラム語訳の原文は、アッシリア語か古ペルシア語であったが、訳文は、筋が簡略化された本文に、アヒカルに仮託された彼の知恵のことばや格言がつづく。本文とアヒカルのことばが一体となった版本が、知恵文学として、古代西アジア世界に流布していた（伊藤義教『古代ペルシア』岩波書店、1974年、56-59頁他。A.カウリー『紀元前5世紀のアラム語パピルス文書』オックスフォード、1923）。

アラム語訳『アヒカル物語』は、キリスト教諸国に流布してきた諸版本に較べると、簡単であるが、いくつかの特徴をそなえている。アヒカルは、アッシリアの王センナヘリブの印章保持者であった。センナヘリブが逝去して、

その子エサルハドンが王位に即いて、アッシリアの王になった。アヒカルには子がなかったので、妹の子ナダンを引きとって育てあげ、彼をエサルハドンの印章保持者にすることを願い出て許された。ナダンは、アヒカルをざん言したため、エサルハドンは、アヒカルに死刑を宣告した。王は、高官ナブスミスクンに、アヒカルを探し出して、処刑するように命じた。ナブスミスクンは、センナヘリブ王の時代、無実の罪で処刑されようとして、アヒカルによって救われた人物であった。ナブスミスクンは、恩義を感じ、家来に命じて、アヒカルの代わりに、自分の去勢した奴隷を殺させて、王にはアヒカルを処刑したと報告した（伊藤、前掲書、244-253頁）。

アラム語版の本文は以上で終わり、アヒカルの知恵の言葉がつづく。アヒカルの名前は、『旧約聖書』の外典の一つである「トビト記」に出てくる。トビトは、アッシリアの王シャルマナセルによって捕囚の身となり、ニネヴェ（ティグリス川上流、イラク北部の都市モスルの対岸にある）に連行された。トビトは、シャルマナセルの子センナヘリブが、同朋のユダヤ人を殺害すると、その死体をこっそり運び去って埋葬した。センナヘリブは、死体を捜したが、見つからなかった。トビトは密告され、センナヘリブは、彼に死罪を宣告した。トビトは逃亡し、彼の財産は没収された。それから40日もたたぬうちに、センナヘリブは、その2人の息子に弑され、2人はアララト山に逃れたので、センナヘリブの別の王子エサルハドンが王位に即いた。

エサルハドンは、トビトの甥アヒカルを財政管理者に任じた。アヒカルは、国務全体の上に影響をもつ身となった。アヒカルは、トビトのことを王に釈明したので、トビトはニネヴェに帰ることができた。アヒカルは、センナヘリブの印章保持者であったが、エサルハドンも再度、彼をその任に就かせた（1.10-22）。ニネヴェの町では、多くの不正が行われ、偽りがはびこっていた。アヒカルは、自分が養育したナダブによって、生きながら、地下の墓に閉じ込められた。しかし、神は、ナダブの卑劣な行為に罰を与えた。ナダブは、アヒカルを殺そうとしたので、アヒカルが再び日の目を見たとき、ナダブは永遠の暗闇に落ちてしまった。ニネヴェの町は、メディアの王キアクサ

レスによって滅ぼされた (14.10-15)。

「トビト記」にもアラム語訳『アヒカル物語』にも、難題の部分がない。アヒカルは、甥のナダン (ナダブ) を養子にして教育したが、裏切られて殺されそうになる。しかし、神の恩寵によって助かったというモチーフは、「トビト記」でも見られるが、「トビト記」ではさらに、アヒカルの伯父トビトが王に死刑を宣告され、逃亡したあと、甥のアヒカルのとりなしで、都に帰還する。アラム語訳『アヒカル物語』の原典は、アッシリア語版あるいは古ペルシア語版であったが、これらの諸版本が、ヘブライ (ラテン) 語版と共存していたと考えられる。トビトやアヒカルは、実在の人物であったかも知れないが、アヒカルの養子ナダンの裏切りや、のちの版本に見られる隣国の王の難題のモチーフなどを併せ考えると、史実というよりは、知恵文学にきわめて近い作品であると思われる。

賢者アヒカルは、イソップ寓話の主人公のイソップに仮託されて、中世に広く流布した。中務哲郎『イソップ寓話の世界』(ちくま新書, 1996年)にいう。『イソップ伝 G本』と呼ばれる『イソップ伝』は、10世紀ないし11世紀の写本で、1952年に印刷本として刊行された(島田清太郎『イソップ伝の研究』中央公論事業出版, 1973年と渡辺和雄『イソップ寓話集』2巻, 小学館, 1982年は、G本の翻訳である)。『イソップ伝 W本』の方は、13世紀から16世紀に遡る10数種の写本に基づいて、校訂されている。

『イソップ伝』にいう。バビロニア国のリュクルゴス王の宰相になったイソップは、貴族の子弟を養子にして、後継者に育てあげようとする。この養子は、王の側室と色恋に耽り、叱責されて逆恨みする。養子は、イソップを反逆者として王にざん言する。王は、ヘルミッポス将軍に、イソップを処刑するように命じる。イソップの味方であった将軍は、その命を助け、王には偽りの報告をする。イソップの死去の報を受けたエジプト王ネクタナボンは、バビロニア王に対し、10年の貢納を賭けて、難題を吹きかける。それは、地にも着かず、天にも触れぬ高い塔をつくる者たちを寄越せ、というものであった。王は、賢者イソップを殺してしまったことを嘆く。このとき、イソップ

の生存が告げられ、やつれた男が連れ出される。養子は刑死は免れたものの、訓戒のことばに鞭打たれ、食を絶って死ぬ。イソップは、エジプトに渡り、鷲の背にそれぞれ子供をのせ、敷地の4隅で鷲を舞い上らせる。子供たちは、空中から「泥と煉瓦と材木と、それに道具を渡して下さい」と叫んだ（中務、前掲書、59-60頁、74-75頁）。ここでは、空中の楼閣をつくるという難題のモチーフは、よく伝承されている。難題のモチーフは、地域が異なると、かなり違ってくるものであるが、アヒカル系統の名残りをよく留めている。興味があるのは、イソップやリュクルゴス王は、ギリシアの国ではなく、バビロニアの人間として描かれていることである。

中国の内モンゴル自治区南部のオールドス地方に伝わる民話に、『アヒカル物語』に似たものがある。昔、人が60に達したら、その子供たちが、父母の口に脛骨でもって羊の尻尾を詰め込み、窒息死させる風習があった。ある家族の主人が60になった。息子は父を殺すことができないので、家の中に大きな穴を掘って、その中に父を隠し、毎日、飲食物を運んで何年か経った。突然、モンゴル皇帝の宮殿に、外国の皇帝が、2種類の、人に見分けのつかないものをもってきた。1つは、ラバのような動物で、人の姿を見ると、体が膨れてますます大きくなる動物であった。もう1つは、1本の太い木で、本と末が見分けられないようにつくり、塗料が塗ってあった。モンゴルの皇帝は、この動物は何であるか、この木の本と末はどのように見分けるのか、分かった者には高い官職と公主（皇女）を与えるであろうというお達しを出した。誰もこの難題を解くことができなかった。息子は家に帰り、匿っている父に尋ねた。父はいった。その木を川に浮かべなさい。木は川の中では、本が先に動き、末があとになる。大きな動物は、ネズミの悪魔であるから、巨大な猫を一匹手に入れなさい。猫を袖口に入れて、動物のそばへ寄り、もし、その動物が小さくなったら猫を放しなさい、と。息子は翌日、皇帝の前で、動物に猫を見せた。動物は猫を見ると、ちぢまって小さな鼠になったので、猫は鼠を食べてしまった。木を水に流すと、本が先に流れ、末はうしろにつづいた。皇帝は息子に、どうやって見分けたのかと尋ねた。息子は、父に教

えられたと答えた。皇帝はいった。60になったら人を殺すのは、間違った風習である。老人を殺すのはやめるようにというお布令を出した。その上、公主をほうびとして息子に与え、婚礼の宴をはり、祝いをした。息子は平和にめでたく栄えた（A.モスタールト『オールドスロ碑集』磯野富士子訳、平凡社、1966年、109-112頁）。

遊牧民やイヌイト（エスキモー）のような移動民の間では、老人は足手まといになるので、独自に処置するようになり、このような風習が生じたと考えられる。『アヒカル物語』の発生にも、このような棄老の風習が反映していると見ることができる。一方では、説話が伝播して、一定の枠の中で各々の民族の説話が成立したとも考えられる。モンゴルでは、人が60になると殺されたが、『アヒカル物語』の冒頭には、60の数が現れる。モンゴルでは、息子は家の中に掘った大きい穴に父を匿う。「トビト記」では、アヒカルは、養子のナダブ（ナダン）に、墓坑の中に閉じ込められる。モンゴルの話の中には、人の姿を見ると膨れて大きくなるラバのような動物が現れる。アヒカルは、自分を裏切った養子ナダンの体を、皮袋のように膨らませて、破裂させる。

モンゴル語版には、皇帝から死刑を宣告された父親を逃がしたり、匿ったりするモチーフはない。ちょっとしたとがで、王に殺されそうになる賢人を匿い、王が必要を感じたとき、王の面前に連れ出す話は、古くからあった。ヘロドトス『歴史』（松平千秋訳、岩波文庫）にいう。ペルシア帝国のカンビュセス王は、狂王としてその名が伝えられている。リュディア王クロイソスは、カンビュセスに、みだりに年端もゆかぬ少年を殺したり、さして罪もない高い位にある多数の人を殺害したりすると、人民はやがて王に反旗をひるがえすでしょうと諫言した。カンビュセスは、弓矢をとってクロイソスを射殺しようとしたが、彼は身を翻して戸外に走り出た。カンビュセスの家来たちは、王の心を知っていたので、クロイソスを匿い、王が後悔して、再びクロイソスを求めるようになった場合、その身柄を差し出して、王の恩賞にあずかろうとした。はたせるかな、王はクロイソスが恋しくなった。家来た

ちは、クロイソスが生きていることを王に告げた。すると、カンビュセスは、クロイソスが生きていることは、まことに嬉しいが、彼を生かしておいた者どもは死罪に処す、と、そのことばどおりに実行した(3.36)。ここでは、いわば死刑を宣告された人物を、再び王の前に連れ出すのであるが、彼らはその手柄を賞されることなく、死を賜わった。クロイソスは、60歳になったので殺されそうになったのではなく、王に諫言しようとして、王の逆鱗に触れ、殺されそうになって逃げる。カンビュセスの許に、隣国の王から難題がとどいたわけではないが、王はクロイソスに会いたくなかった。

このカンビュセスの祖父もカンビュセスを称した。彼は、メディア王アステュアゲス王の王女マンガネを娶り、一子キュロスをもうけた。アステュアゲス王は、夢占いから、娘が生む子が、自分に代わって王になると聞かされていたので、ハルパゴスという者に命じて、赤子を殺し、山に捨ててくるように命じた。ときを同じくして、山で牛を飼っている、ミトラダテスという牛飼いの女房が出産したのであるが、死産であったため、赤子と死児を交換し、アステュアゲス王には、赤子を殺して埋葬したと報告した。牛飼いの女房は、赤子をわが子として養育した。赤子は成長するにしたがい、頭角を現すようになった。アステュアゲスは、子供を接見したとき、自分の捨てた子ではないかと思い、牛飼いを問い質したところ、真実を白状した。王はハルパゴスを呼んで、赤子を捨てた事情を尋ねた。ハルパゴスは、事実と反して、牛飼いに全てをまかせたと答えた。王は、わが子(孫)が生きていることを告げ、生きて戻った子のところに、汝の俸を寄越してくれないか、といい、さらに、子供を救って下された神様に感謝して、お礼のお祭りをしたいので、食事をしにきてくれるようにハルパゴスにいった。

ハルパゴスは大喜びで家に帰り、13歳位になった息子を王宮に送り出した。アステュアゲスは、子供が来ると、殺して手足をばらばらに切り離し、肉を焼いたり煮たりして料理し、宴の始まるのを待った。アステュアゲスとハルパゴス以外の陪食者には、羊の肉が出されたが、ハルパゴスには、わが子の頭と手足以外の肉が出された。ハルパゴスが十分に満腹したあと、給仕が子

供の頭と手足を入れた籠をもってきて、蔽いを取り、好きなものをお召し上がり下さいといった。ハルパゴスが蔽いをとって見ると、それは、子供の頭と手足であった。彼は仰天することもなく、自若として、残った肉をもって、家に帰っていった (1.108-119)。殺すことを命じられた子を殺さずに生かしておいたハルパゴスは、クロイソスを匿った者たちと同じように、死罪に処せられたのではないが、もっとひどい仕打ちを受けた。しかし、メディア王アステュアゲスの孫キュロスが、ペルシア人として成長し、祖父に謀反を起こしたとき、ハルパゴスはキュロスがわについた。古代ペルシアには、『アヒカル物語』の前半部が、広く流布していたことが分かる。

コインベア・ハリス・ルイス共著の前掲書に入っているアルメニア語版と、それにのっとった古トルコ語版は、アヒカルが自ら1人称で語る形式をとっている。アルメニア・古トルコ語版は、古いアラム語版とは異なって、前半は、アヒカルが1人称で語る箴言から成る。後半は、ナダンがアヒカルをざん言したため、アヒカルは斬首の宣告を受ける。死刑執行人は、かつてアヒカルに恩を受けた者であったので、アヒカルにそっくりな死刑囚を処刑して、アヒカルを匿った。それ以後の話は、隣国の王から難題が寄せられ、アヒカルが現れて解決するといった同じ筋の話である。

アラム語版とモンゴル語版に見られる60という象徴的な数は、70あるいは80という数字に変わって、朝鮮の民話にも伝わっている。昔は人が70（あるいは80ともいわれる）になると、山の中に棄てられた。ある人が、父がちょうど70になったので、父を支架（背負い梯子）にのせて山中に入った。彼は父にたくさんの食物を与え、支架と共に父を棄てて帰ろうとした。そのとき、一緒についてきた息子が、捨てられた支架をもって帰ろうとして、それを背負ったので、その人は、そんなものは、もって帰るのではない、とさとした。子供は、お父さんが年をとったとき、この支架でお父さんを棄てにゆかなければならない、といったので、彼は子供のことばに感心して、棄てた父を家に連れ帰った。それ以後、老人を棄てる悪習はなくなったという（孫晋泰『朝鮮の民話』岩崎美術社、1966年、31-32頁、「棄老伝説」〈『朝鮮民譚集』郷土



研究社、1930年)。

モンゴル語版もそうであるが、主人公は死刑を宣告されて、匿われるのではない。モンゴル語版では、老人は山に棄てられるのではなく、口の中に羊の尻尾を詰め込んで殺された。朝鮮語版では、それさえもなく、父を山へ棄てにゆく。モンゴル語版がまだ保持していた、父を匿うモチーフもない。モンゴル語版や朝鮮語版から推測できるのは、生きた老人を棄てるのではなく、老人の死体を墓坑に入れたり、支架で担いで、山に棄てにいく習俗があったのではないかということである。

ヘロドトスは次のようなことを伝えている。スキュティア人の近くに住んでいたマッサゲタイ人（語末のタイは、北方イラン系の複数語尾であるので、スキュティア人〈スキュタイ〉と同じようなイラン系民族であろう）の国では、生きていられる年齢の制限というものが、格別あるというわけではないが、非常な高齢に達すると、縁者が皆集まってきてその男を殺し、それと一緒に家畜も屠って、肉を煮て一同で食べる。こうなるのが、いちばん幸せなことであるとされる。病死した者は、食わずに地中に埋める。殺されるまで生きのびられなかったのは、不幸であったと気の毒がる（1.216）。

モンゴル語版では、老人の口に羊の尻尾をくわえさせ、脛骨でのどに押し込み、窒息死させた。老人が不要になったから殺したのではなく、このような方法で生きたまま殺し、上帝への供物としたのであろう。このような場合、あの世に送る人間を穢してから聖化し、神の許に送ったのである。モンゴルでは、脂肪のかたまりのついた尾の部分で、これも、何らかの意味をもっていたと思われる脛骨でのどに押し込んだのであった。イランの伝統的な褒め殺しの方法は、口の中に金貨を押し込むそれであった。適量の金貨を口にいられてもらう場合はよかったが、王の気持ち次第で、この褒賞は、生と死を分かった。イランの場合も、金貨で穢されて窒息させられ、神への供物とされたのであった。マッサゲタイの場合も同じで、男が高齢に達すると、その男を殺して神への供物とした。そのあと、男の肉と、家畜の肉を煮込んで一同で食べた。つまり、神人共食をしたのである。死んだと思った幼児キュロス

が、祖父王の前に現れたとき、王は神への感謝祭をするといつて、ハルパゴスの息子を料理して父ハルパゴスに食わせた。招待された者らは、羊の肉を食べたとあるが、話の展開上そうなのであつて、本来は、皆で羊の肉と人間の肉を食べたのであろう。ここでも、神人共食が見られる。

キュロス捨て子譚では、最初、キュロスが捨て子にされたとき、ちょうど死産した牛飼いの妻の死児と交換して、死児を神への供物とした。ハルパゴスの子の場合、二度目の神への供物である。アヒカルは死刑を宣告されるが、それは、神に供物として捧げられることを意味した。このとき、奴隷が身代わりになって殺された。つまり、奴隷が供物として捧げられた。アヒカルが生きて現れたとき、彼をざん言した養子のナダンが供物として殺されたのである。ナダンは、皮袋が破裂するように殺されるが、恐らく、死体を洗った水を、のどの奥に流し込まれ、腹がぱんぱんに膨れあがったあと、棒で袋叩きにされ、四肢の骨も砕かれ、穢されて神への供物とされたと考えられる。このような供物のつくり方は、刑法として用いられた。かつての朝鮮にもあつた。神への供物は、本来は、このように穢すことによって聖化したのである。朝鮮では、過失致死犯は次のようにして罰せられた。人々は、酸っぱい、濁った、鼻をさすような匂いのする水で死体を洗ったが、その水を注水器で罪人の喉に流し込み、胃の上を棒で叩いて破裂させた（ヘンドリック・ハメル『朝鮮幽囚記』生田滋訳、平凡社、1969年、41頁）。イランにも、同じような刑法があつた。その他、この種の水は、不妊女の全身に注いで、彼女が妊娠するように促した。

モンゴル帝国の第5代皇帝（在位1260-1294）で、のちに中国元朝の初代皇帝（1271-1294）となったフビライ・ハンは、ウイグル人サンガを財務大臣に任じた（1287）。しかし、サンガの横領行為が密告され、その罪によつて、彼は口にごみを詰め込み、死刑に処せられた（1291）。サンガの莫大な財産は没収され、サンガの犯罪に連座した2人のイスラム教徒も、サンガと同じく死刑に処せられた（C.M.ドーソン『モンゴル帝国史』3、佐口透訳注、平凡社、1971年、125-127頁）。この刑の仕方は、口の中に金貨を押し込

んだり、羊の尾を押し込むのと同じやり方で、死刑囚を穢したのである。

生まれたばかりの赤子を殺して神の許に送ることと、最老年の者を殺して神の許に送ることは、両極端の行為である。捨て子の習慣は、もとは、長子が神の取り分の初物であるという考え方に由来するのであろう。こちらの方からは、始祖伝説や英雄伝説が発展した。捨て子の習慣は、その子が大きくなったら、親を殺すであろうと占い師にいわれたことに由来する。捨てられた子は、捨てられた老人と同じように、何らかの方法で生き延び、ギリシア神話のオイディプスのように、父王を殺し、母を妃として、王となる。ここでは、親は子に殺される運命にあるが、殺される親からは、『アヒカル物語』は発展しない。子が父を捨てる話は、もとは、子が父を殺して神に供え、皆で神人共食したことに由来すると考えられる。捨て子の習慣でも、ハルパゴスの子が祝いの宴会で食べられているので、これら二つの習慣の間には、かつては人肉を食う共通項があったと考えられる。殺される老人も幼児も、共に神そのもの、あるいは神の子と考えられた。人間の親は神の子を食べることによって活力を身につけ、人間の子は、老成した神を食べることによって活力を身につけた。

中国にも、似たような習俗があった。『列子』に以下のような話が記録されている。南方の越の東に輒沐<sup>ちようもく</sup>という国があった。長子が生まれると、生きのまま食べ、これを宜弟<sup>ぎてい</sup>という。祖父が死ぬと、祖母を背負って捨てにゆき、死者の妻とは、居所を同じくすることはできないという。また、楚の国の南に炎人の国がある。この国では、親が死ぬと、その肉を割いてこれを捨て、そのあとで骨を埋め、喪をつとめる（「湯問篇」第五）。宜弟<sup>ぎてい</sup>というのは、弟に宜しということで、神の取り分としての、神の子である長子を神人共食した風俗があったことを物語る。祖父が死ぬとその肉を食うとは書いてなく、その妻を捨てにゆくとあるのは、姨捨ての習俗に通ずるものである。炎人の国では、親が死ぬと、その肉を割くとある。割いたあとの骨皮内臓は捨てたのであろう。骨が白骨化するのをまって埋葬した。

10世紀末から11世紀初頭に成立した清少納言の『枕草子』に『アヒカル物

語』の日本語版が見られる。昔、ある帝は、若い人だけを大切に、人が40歳になると殺させた。人々はみな、都の外に行って隠れた。中将だった人に、70に近い、賢い老人が2人いた。中将は、家の中に穴を掘って部屋をつくり、いつも行って面倒を見た。人にも朝廷にも、もう死んでしまったといふふらしていた。中国の帝王が、この国の帝王を打ち負かして、この国を取ろうとして、難題をしかけてきた。2尺くらいの木で、両端をつるつると丸く削った木を送り、その本と末はどちらかと尋ねてきた。皆、考えあぐねた。中将は帝の心痛を気の毒に思い、親の許にいて尋ねた。親が教えていうには、流れの速い川に直角に投げ込むと、反転して流れゆく方が末である。そのように印をつけて送り返しなさいと。中将は、帝の前で試み、中国の帝に送ると、そのとおりであった。また、2尺くらいの同じ長さの蛇を2匹よこして、どちらが雄で、どちらが雌かと尋ねてきた。中将がいつものように親に尋ねると、蛇を並べて、尾の方に、細い若枝を近寄せたとき、尾を動かさない方が雌だと教えた。内裏で試みたところ、そのとおりだったので、印をつけて中国に送り返した。

しばらくして、七曲りの小さな玉で、中に穴があいていて、左右に口を開けているものを送ってきて、これに糸を通せ。中国では、誰でもできる、という。朝廷では皆、いかなる上手の人も、何もできまいといった。そこで中将は、父親に尋ねたところ、2匹の蟻の腰に糸を結び、向うがわの左右の口に蜜を塗りなさいといった。その通りにすると、蟻は蜜の香りに誘われて、向うがわの穴から出た。そこで、糸が通った玉を中国に送った。中国は、日本は賢い国だといって、その後は難題をしかけることもなくなった。帝が中将に、どんな褒賞や官位を与えようかといったとき、年老いた父母が、行方不明になっています。探し出して、都に住むことをお許し下さいと申し上げたところ、たやすいことと許されたので、世の親たちは大よろこびであった。中将は、公卿、大臣にまで昇進した(226段「社は蟻通の明神」テキストによって段数が異なる)。

この物語の冒頭の年齢に二通りの伝承が見られる。人生七十古来稀なりと

いわれた時代には、70歳は文字通り古稀で、人間にして神となる年齢であった。前述したように、無明の時代には、子が、このように神になった親を食べたと考えられる。親を匿うようになったのは、食人が、人倫にもとると考えられるようになってからのことである。もう一つの伝承は、古稀ではなく、現代から見るとまだ老年に入らない不惑の年齢になると、殺される習俗である。40に達すると、人々は自ら都の外に隠れたとある。フレイザーの王殺しの論理によると、王は肉体的、精神的最盛期に殺され、次の王にとって代わられた。このような習俗が、その背後にあるようである。

中将は、70歳の親を、家の中に穴を掘って匿ったが、これは、モンゴル語版と同じである。親を家の中の地下に匿ったとあるが、もとは、殺した親を、居間の地に埋めたのであろう。イランのゾロアスター教徒は、昔は居間（地面がそのまま床面になる）に凹みがあり、家に死者が出たとき、死体を凹んだ床上に置いた。前ゾロアスター教時代、人は生まれた部屋で死に、そこに埋葬されるのが古いしきたりであった。ゾロアスター教が国教となった古代イランでは、それ以前の習俗の残映が見られるが、これもその一つである。ゾロアスター教になってからは、死体は土葬されることは絶対になく、沈黙の塔に運ばれて、鳥葬にされる。床面に凹みができるのは、その家の祖先あるいは氏族の始祖が埋葬された上に居間をつくり、余分の土を外に出して、土を平らに均しても、時の経過と共に、中央が凹んでくるからである。因みに、石の上に人工的に彫ったキリストの足跡や仏陀の足跡は、埋葬後にできる凹みを、足跡で表わしたものである。臼型の要石も、発生的には同類に属する。

12世紀の『今昔物語集』には、似たような伝承に基づいた話が収められている。昔、天竺に、70歳を超えた人を他国に流す国があった。その国に一人の大臣がいた。老いた母に孝養をつくしていたが、母は70を超えていた。母を遙かな国に流すことは、堪えられないことであった。大臣は密かに地下室を掘って、家の隅に母を隠した。かくして、何年か経ったころ、隣国から同じような牝馬2頭を送ってきていうには、親子を定めて送り返せ。もしでき

なかったら国を滅ぼすだろうと。国王は大臣にその方法を尋ねた。大臣は家に帰り母に尋ねると、2頭の馬の間に草を置くとよい。元気よく食うのが子で、先の1頭が食い残したのをゆっくり食うのが親であると教えた。そのとおりにして、それぞれ札をつけて送り返した。その後、本と末を同じように削って、漆を塗った木を送ってきて、その本と末を定めよといった。母に尋ねると、水に浮かべて、少し下がった方が本だと教えてくれた。その旨を記して送り返した。その後、象を送ってきて、象の重さを計れという。母は大臣に教えた。まず象を船に載せ、吃水線のところに印をつける。それから象を下ろす。それから石を積み、象の吃水線にくるまで、石を積みつづける。それから、石を少量ずつ計ってゆき、重さを合計すれば、象の重さが分かる。国王はそのとおりにして計量し、重さがどれだけあるかを書いて送った。

隣国では、このように賢者の多い国と事を構えるのは不利であると考え、年来抱いていた敵愾心を捨てて、友好国になった。国王は大臣を召して、汝の徳のお蔭で、この国は恥辱をまぬがれ、敵と和睦できた。このような難題をどのようにして解決したのか、といった。この国では、昔から70歳を超えた人は、他国に流すのが規則になっています。私の母は、70歳を超えて8年になりますが、朝夕孝養をつくすため、地下室をつくって、そこに匿っておきました。老人は見聞が広いので、全てを母から教わりました、と大臣は涙を滂沱と流して答えた。国王はいった。老人は貴ぶべきものである。今まで流した老人は、貴賤男女を問わず、召し返す旨の宣旨を下そう。国の名も、棄老国を改めて、養老国にしよう、と（巻第五 天竺「七十余人流遺他国国語」第卅二）。

大系本『今昔物語集』一（岩波書店、1959年）の頭注によると、出典は『雑宝蔵経』第一（四）「棄老国縁」四であるが、『今昔』の母は原典では父になっているほか、難題は全て天神が試すことになっている。また、原典には、2蛇の雌雄を知ること、睡者と覚者の別、一掬の水が、大海より多いこと等を以て試す話がある（前掲書、399頁）。インド・仏教系の『アヒカル物語』では、棄老の年は70歳以上になっている。40の数はない。大臣というモ

チーフも西アジアに見られるので、60という数とはやや異なるが、まだ西方型の面影がある。老人を地下室に匿うモチーフもある。居間の地下に埋葬した名残と考えられるが、実際に老人を地下室に入れて、徐々に窒息死させる風習があったのかも知れない（「トビト記」を想起させる）。このあと、例によって、隣国の王が難題をしかけてくる。象の目方を計る話は、中国の正史にもある。鄧哀王沖は幼くして聡明で、5－6歳で、その知恵は、成人のそれに等しかった。あるとき、呉の孫権が巨象を送ってきた。魏の太祖（曹操）は、その目方を知りたいと思ったが、誰もその方法を提案する者がなかった。沖はいった。象を大船の上に置き、その水痕に刻みをつけ、その印まで他の物を載せて計れば、重さを知ることができる、と（『三国史』魏書卷第二十「鄧哀王沖伝」）。物語の主題が象の目方を計ることなので、インドのような南方に流布した物語に由来するのであろう。このような仏教説話のモチーフのいくつかは、姿を変えて中国の説話に入っている。

仏教説話の内部で、すでにその話柄やモチーフがくずれている例もある。昔、仏が舎衛国の祇樹給孤独園（祇園精舎のこと）に滞在したとき、波斯匿王はしのくに梨耆彌おうれきみという一人の大臣がいた。大臣は7人の男児を儲けたが、6人には妻を娶ってやった。第7子のみが残ったが、大臣の意を受けた一人の婆羅門が、この子の妻を求めて遍歴し、特叉尸利国タキシラに至った。婆羅門は、この地で一人の聡明で、千里眼をもった女性を見付け、第7子の妻に相応しい女性であると、大臣にすすめた。ときに、特叉尸利王は、舎衛国に、同じ形、同じ毛色の2匹の雌馬を送り、母子をどのようにして見分けるかという難題をしかけてきた。国王は群臣を集めて相談したが、名案がでなかった。大臣が家に帰ってそのことを話すと、第7子の妻がいった。2匹の馬に草を与えて下さい。草を押して与えるのが母馬で、子はこれをとって食べます、と。そのとおりの答えを特叉尸利王に送った。こんどは、特叉尸利は、2匹の全く同じ蛇を送ってきて、雌雄を決めよという。大臣が嫁に尋ねると、1本の小枝を地上に置き、2匹の蛇をその上に置いて下さい。じっとして動かないのが雌で、動くのが雄です、と答えた。舎衛国王は、そのとおり特叉尸利国王

に答えた。次に、1丈ほどの、上下が全く同じ木を送ってきて、上下を識別せよという。嫁がいうには、この木を水に投入して下さい。沈んだ方が下（根）で、浮く方が上（梢）です。王はこのことを特叉尸利王に知らせた。特叉尸利王は、舎衛国には賢者が多いと感嘆し、以後、友好を修めた。舎衛国王は、大臣の第7子の妻を王妹として遇した（『賢愚経』巻第七、三十七「梨耆彌七子品」、『大正蔵』第四卷、399-446頁）。ここでは、賢者は年老いた父母ではなく、父の末子の妻で、今までの伝承とは全く逆になっている。死刑を宣告されて、地下室に匿われることもない。70歳や60歳の老人という70や60の数が、ここでは、7人の息子とか、6人が妻帯したとかいう数に現れている。大臣のモチーフは出るが、ここでは、大臣は主人公ではなく、死刑を宣告されることもない。隣国の王から難題をもちかけられるのは、同じである。

前出の『雑宝蔵経』は、同じ本縁部に属するが、別系統の伝承に基づいた話を載せている。昔、仏が舎衛国にあったとき、宿老を恭敬すれば大利益がある。未だかつて聞いたこともないことが聞け、名声が遠くまで達するので、智者が敬うところであるといった。さらに仏はいった。過去久遠に棄老という国があった。この国の国王は、老人がいたら、遠くに棄てた。一人の大臣がいたが、その父が年老いたので、国法に従って遠くへ棄てるべきであった。しかし、大臣は孝順の心があったので、地下に密室を掘り、父を中に入れ、養った。このとき、天神が2匹の蛇を宮殿の床上に置いて王にいった。もし雌雄を識別できたら、汝の国は、安泰である。もしできなければ、汝の身と国は、7日後に覆滅するだろうと。王は群臣に相談したが、誰も名案が出せなかった。大臣は家に帰って父に尋ねた。父はいった。軟らかい敷き物の上に蛇を置くと、雄は騒いで匍いまわがるが、雌はじっとしていると。そのとおりにすると、果たして雌雄の区別がついた。天神は、また尋ねた。眠っているのに、誰を目覚めているとし、目覚めているのに、誰を眠っているとするのか。大臣が父に問うと、それは学人だと答えた。諸々の凡夫の間では学人は覚者と見なされるが、修行して最高の学位に達した羅漢の間では、学人は



睡者であるからだ。

天神はさらに問うていった。この大白象は、いかほどの目方があるかと。父は、象を船の上に置き、大池の中へ浮かべ、目盛りをつけ、あとで石を入れて計れば、その目方を知ることができるという。王は天神に、そのように答えた。さらに天神は質問した。一掬の水が大海よりも多いというのは、どういうことか。父は大臣に教えた。一掬の水を、仏、僧、父母、病人に施せば、その功德によって、数千万劫も福を受けることができる。海水は極めて多いが、1劫にすぎない。このことから推量すると、一掬の水は、大海より百千万倍多いことになる。国王はこの言のとおり天神に答えた。このあと、天神は、餓えた人や、手足に枷をはめられ、首に鎖をかけられ、身中より出た火で焼けただけの人や女人に変身し、いろいろ質問する。さらに、まっすぐな、平等に削った梅檀の棒を出して、どちらが根元になるか質問する。さらに、形も色も同じ2匹の馬を示して、どちらが母で、どちらが子であるかを識別せよという。これらの問いに全て答えたので、天神は王を称讃し、汝の国を擁護しようといった。国王は大臣に、汝の知恵のお蔭で、国家が安泰でいられた。あれは、汝自身が考えたことなのか、人あって汝に教えたのか、と尋ねた。大臣は、自分には老父があり、王法を犯して、地下に匿っています。この父の知恵であって、自分の知恵ではない。願わくは、他の国と同じように、老人を養うことを許されんことをと申し上げた。仏がいうには、そのときの老父は自分であり、大臣は舍利弗であり、国王は阿闍世であり、天神は阿難であった、と（巻第一、四「棄老国縁」、『大正蔵』449-450頁）。

『今昔』では、70歳の老人と規定しているが、「棄老国縁」では、ただ老人となっている。『今昔』では、母を匿うが、こちらでは父を匿う。難題は、『今昔』では隣国の王がしかけたのが、こちらでは、天神がしかけたとなっている。天神がしかける難題は、『今昔』と全く同じものがある一方、天神の難題で、『今昔』に見られないものもある。一掬の水と、大海の水の比喻欠損は、特に目に立つ。『今昔』では、本生譚として仏が語った形式をとらないが、「棄老国縁」では、最後に、釈迦の本生として語られている。『雑宝

『藏経』所収の「棄老国縁」（6世紀後半に編集された、仏教百科全書『法苑珠林』巻第四十九棄父部第四にこの物語がそのまま引用されている）は、『今昔物語集』巻第五天竺「七十余人流遣他国国語」第卅二の直接の出典ではないであろう。『法苑珠林』は奈良・平安時代に、日本でも広く読まれたので、出典の一つとなったであろうが、これに取められた棄老説話と並行して、別の書承、口承の棄老説話があったと考えられる。ことに、『今昔』の場合、老母を棄てるうばすて（おばすて）伝説になっているからである。

パーリ語による南伝の<sup>ジャータカ</sup>本生譚の中に、棄老説話の部分はないが、難題が列挙してある長大な物語がある。それは、本生譚第546話で、王の命令によって、大臣が満7歳の賢者マホーサダを試験する場面に見られる。その試験項目は19あり、そのうち8番目の項目は、棒の本末をどのようにして知るかであり、10番目の項目は、2匹の蛇の雌雄は、どのようにして識別するかであり、12番目の項目は、八角形のマニ珠を貫く糸が切れ、誰も中につまった古い糸をとり出して、新しい糸を通すことができなかつた。どうすれば、新しい糸を通すことができるかである（中村元監修・補注、阿部慈園他訳『ジャータカ全集』10、春秋社、1988年、6-7頁、17-20頁）。

8、10、12番目の難題は、3部に大別される19の難題の第2部に入っている。8番目と10番目の難題は、その解決法は、従来見てきた説話の中に述べられているのと大同小異であるが、12番目の難題の解決は、少しちがう。ここでは、賢者は蜜をマニ珠の両側にある穴に塗らせる。さらに、毛糸の先端にも蜜を塗って、少し穴に挿し入れた。それを蟻の通り道に置いた。蟻たちは、蜜の香りに誘われて、マニ珠の中の古い糸を食べながら中に進み、かつまた毛糸の先端をくわえてひっぱりながら、他の穴から出てきた（前掲書、19頁）。ここでは、蜜と糸を使っているが、そのやり方はすっきりしない。蟻の細腰に糸を結び、蜜に向かって穴を通す方が簡明である。このような難題を解決する物語は、上来見てきたように、インドばかりでなく、古代西アジアに広く流布していた。難題は、迷路と同じように、ある状態から次の状態に移行するとき、その境界に横たわる障害と考えられたに違いない。ジャー

## 棄老説話の起源

タカ第546話の主人公である賢者マホーサダは、敵王の城内に囚われの身となったヴェーデーハ王を、トンネルを掘って脱出させた。トンネルは、ここでは幽閉と開放の中間に横たわる解決されるべき障害である。多くの棄老説話で、土中に匿われる老人が、度々難題を解決して子に教える場面がある。このような場面は、古代の葬儀や婚姻の一場面であったかも知れない。

柳田国男は、「親棄山」(昭和20年2月—3月)に次のようなことを論じている。ある男が、60になった親をもっこに入れて、小さい息子に片棒をかつがせて棄てにゆく話は、古くから中国でも有名な話だったということで、外来の話である。ある国の王が、老人はみな棄てるように命令を出す。一人の孝行息子が親を地下室に匿う。敵国が難題を出してくる。息子は親にその解答を教わり、国を救う。この話も外来の話である。難題というのは、日本で行われるものは7つあり、そのうち5つは外来のものである。つまり、七曲りの玉の緒、木の本末、親子馬、2匹の蛇、象の計量をモチーフとする難題は外来のもので、灰縄千束と打たぬ太鼓の鳴る太鼓の2つは日本本来のものとする。灰縄千束というのは、殿様が灰で縄を縛えという。老人が、縄千束を焼いたら、できると教える。古代西アジアには、泥で縄をつくれという難題がある。老人が、縄を泥に浸けて、鉄の箱の中に入れて焼くと、泥の縄が手に入ることを教える。柳田説では、外来の説話は、インド起源であるという。外来の説話のほかに、古来、日本独自の親棄ての説話があったので、それが台木となって、外来の話が接木として入り易かったと柳田は説明する。柳田は、次の説話は、外来のものでなく、これこそ日本本来の説話であったとする。

信濃の更科に一人の男が住んでいた。幼いときに親が死んだので、叔母が若いときから母のように養育した。男の嫁は、しうとめと気が合わず、男を唆して、月のあかい夜、叔母を山に棄てさせた。しかし、男は、あかるい月をながめて、「わがころなぐさめかねつ更科やをばすて山に照る月を見て」と詠んで、山に登って親をつれ帰った。それ以来、この山ををばすて山というようになった。これが『大和物語』(日本古典全書、南波浩校註、朝日新

聞社, 156, 1961年) が伝える姨棄山説話である (『定本 柳田國男集』第二十一卷「親棄山」)。この物語は、和歌が入って、一見、純日本的なものと思われるかも知れない。しかし、甥を養育し成長させ、その甥に裏切られて山に棄てられるが、親は棄てられた山から戻ってくるという話の筋は、アヒカルが甥のナダン<sup>ナダン</sup>を養育し、ナダンにざん言されて逃げて隠れるが、その知恵が用いられて出現する話の日本版である。柳田説のように、これを日本起源とする必然性はない。たしかに、柳田のいうように、父や母が、息子の背に負われて、途中、木の枝を折って栞とし、そのわけを問われて詠んだ歌、「道すがら枝折<sup>しおり</sup>々々と折り柴はわが身見棄てて帰る子のため」や「奥山にしをる栞は誰のため身をかき分けて生める子のため」は、純日本的なもので、ここから、さらに日本的な説話が発展したことは間違いない。あるいは、このような親の愛情をモチーフにしたものも、日本以外の国に見られるかも知れないのである。

『大和物語』は、10世紀半ばに成立した歌物語である。とり入れた説話は、それ以前のものであるが、古い時代、口承で流布していた可能性がある。仮に、この説話が外來說話であるならば、父あるいは母が、養育した甥あるいは姪に裏切られる話に基づいている。さらに、その根元にある考えは、子のない親さらには親のない子が、親を殺して葬ったかも知れない時代の習俗に根ざしているのかも知れない。『大和物語』型の民話には、息子は心がやさしいが、嫁が姑を憎んで、夫に姑を山に捨てさせる。夫は嫁のことばどおり、山でかやの小屋をつくり、母を入れ、火をつけて逃げ帰る。婆は抜け出して火にあたっていると、鬼の子が現れ、偶然の頓智で婆は小槌を手に入れる。婆は小槌で地面をたたき、町をつくって女殿様になる (関敬吾『日本昔話大成』9, 角川書店, 1979年, 523A「親棄山」, 523B「蟻通明神」, 523C「親棄畚」, 523D「親棄山」, 524「殿様の難題=打たぬ太鼓」。稲田浩二・大島建彦・川端豊彦・福田晃・三原幸久編『日本昔話事典』弘文堂, 1977年, 「うばすてやま」110-111頁, 三原幸久)。

ここでいうかやの小屋は、もがり (殯) の小屋あるいは<sup>たまや</sup>霊屋を想起させる。

## 棄老説話の起源

婆をこの小屋の中に入れて火を放ったとあるが、もがりの完了を意味する行為で、婆は死体として入ったと考えられる。説話では、婆は小屋を逃げ出す。この小屋は、上来しばしば、各地の物語に出てきた、老人を匿う地下室に対応する。両方とも、死体を収める部屋であったと考えられる。山の小屋は、年とった死者を背負っていく子の姿を彷彿させる。柳田説では、これこそ日本的な説話で、のちに大陸から棄老説話が輸入されたとき、話の基礎ができていたので、たやすく受け入れることができたという。柳田国男監修『民俗学辞典』（東京堂、1951年）は、墓の項の中で、おぼすて山・棄老伝説が、葬地に後年付着したと思われる場合が多く、したがって、その伝説の存在する地にも留意する必要があるという（「墓」462-464頁）。「トビト記」では、アヒカルは、ナダンによって、生きたまま墓の中に閉じ込められたとある。一方、息子が老人の死体を背負って山に登って埋葬し、霊屋をこしらえてそれを焼いて帰った時代があったことが分かる。日本独自の風習のように映るかも知れないが、各国の民俗の葬法が固定化する以前は、これに類した葬法をとったと考えられる。

アールネ＝トムソン『昔話の型』（ヘルシンキ、1973年）922Aの項はアヒカルで、ざん言された大臣が、その知恵によって、元の地位に戻る型があげられている。981の項は、匿われた老人の知恵が王国を救う話で、饑饉で全ての老人が殺されるようにとの命令が下る。一人の孝行息子が父を匿う。若い支配者らの下で、全てがうまくゆかなくなったとき、老人が現れて、決められた仕事をやり遂げ、その知恵で息子を助ける型があげられている。アイルランド89、セルボ・クロアチア61、リトワニア54などのように、ヨーロッパの周縁部に、類話が生き残っている。これらの物語は、難題を解決する話を中心になっていて、東アジアの類話のような、古いタイプからは遠のいてしまった観がある。アールネ＝トムソンは、アヒカルを7行ほどの別項に立てたが、その関連性が十分に見抜けなかったらしい。老人を生きたまま棄てる話として伝えられたが、恐らく、古くは死体——年齢に関係がない——を棄てたあと、これから成長してゆく、まだ余命がたっぷりある子供を犠牲に

し、死者の再生を願ったのであろう。『列子』によると、中国では、祖父が死ぬと祖母を背負って棄てる習慣があったが、それと同時に、あるいはその前後かは不定であるが、長子が生まれると、生きたまま、それを食べる風習があったのは前述したとおりである。一神教が成立するずっと以前、ヘブライ人の中には、長子は初物として神の取り分であるとする思想があった。アブラハムが、長子イサクを燔祭に供して、焼いてその煙を天に送ろうとした故事がある。その当時の神は、まだ、死と再生を繰り返す神に近い存在であったと考えられる。年老いて死んだ神に、幼児を犠牲として供え、神の再生を祈願したのであった。これが、神の子としての人間の長子と神との関係であった。中国では、神と人間の関係はなくなり、全てが人間界のできごととされるようになったので、長子は人間が食べるようになったのであろう。

穂積陳重が、『隠居論』の始めに、隠居の起源を論じて、「隠居俗は、食老俗、殺老俗、棄老俗とその社会的系統を同じうし、これらの蛮俗が進化変遷して、竟に老人退隱の習俗を生ぜり」と述べたところ、この説は、ドイツのヤコブ・グリム（1785-1863）の説に得たものだという人が出てきた。穂積は、ドイツでは老人を棄てる習俗が、後世退隱俗を生じたというグリムの『ドイツ法律故事彙』中の記事を引用して、自説の支証とするつもりであったが、彼の説全体が舶來說と思われたと嘆いている（穂積陳重『法窓夜話』岩波文庫、1980年、「舶来学説」219頁）。穂積が明治17年、「法律五大族の説」を『法学協会雑誌』第1号から連載し始めたとき、穂積自身は、自分が研究した結果を出したつもりであったのが、間もなく「あれは西洋の何という学者の説ですか」との質問を受けたので、「あれは全く自分の説である」というても、なかなか信じてくれず、中には、その原書を見つけたという人が現れる始末であった（216頁）。穂積陳重の学説は、非常に興味深い。彼の学説によれば、老人を匿った地下室は、隠居部屋の始まりである。老人が、戸主権を息子に譲り、隠居するようになったとき、この種の話がつくられたと考えることができる。しかし、隠居説では、その子や関係者の子が殺害される理由が説明できない。『アヒカル物語』とその系列の話は、穂積のいう殺老

## 棄老説話の起源

俗、棄老俗がその背景にあるので、その限りにおいては、隠居制に変遷する動機をもつ。一方、この種の話が、古代の墓地、埋葬地で発達したという調査がある。棄老説話には、老人をもっこに入れて、背負って山に棄てにゆく場面がある。生きた老人を棄てる話であるが、もっこに入れて背負われている老人は、既に死んでいるのかも知れないのである。難題解きの知恵文学は、隠居のもつ知恵と重なり合うので、国や地域によっては、物語の教訓として、老人を大切にしなければならないということが最後に語られる。棄老説話は、古い時代の、山への死体遺棄と、生きた老人の山への遺棄が重なり合って行われた時代を追憶した文学であろう。

付記 山崎春成学長の定年退職記念号に、棄老説話を載せていただくのは、考えようによっては、常識の域を超えている。私は、山崎学長が担当されていた地域文化学のポストが空いたため、後任を公募している旨を旧友の後藤邦夫教授から聞き、応募させていただき、沖浦和光教授、谷本泰三教授、柳父章教授、岩津洋二教授の面接を受け、文学部教授会で採用を決定された。本稿は、平成7年度の原山煌教授の総合講座で話した、「シルクロードを渡った説話」のメモを文章にしたものである。原山教授も、私の三高時代の旧師故羽田明教授の指導を京都大学で受け、さらに原山教授の父君は、三高では羽田教授とは同級生であられた。この論文が書けたのも、このような縁があったからで、縁がなければ、何事も成就することはない。不思議な力を感じている。昭和26年、京都大学で伊藤義教先生について、カウリーのテキストを使って、ベヒスタン碑文のアラム語版や、『アヒカル物語』を学んだが、それ以来、気にしていたことがまとまって、ほっとしている。これが最初の縁であった。

## The Story of Ahikar

Eiichi IMOTO

The Aramaic version of the story of Ahikar; The story of Heykar (Ahikar) in the Arabian Nights; Ahikar in the Book of Tobit; Ahikar in the Aesop's Fables as a Babylonian vizier; Ahikar in the Old Turkish and the Mongolian versions; custom of killing old men; sheltering of the escaped old men in the cellars; the story of Cyrus the Great of the Persian Empire; abandonment of old men in Korea; an obedient son took back an abandoned old man home; a neighboring king made unreasonable demands upon the king who had ordered to abandon an old man; an old man's wisdom helped the king solve the demands; no mention about the neighboring king making unreasonable demands; Ahikar in the Buddhist versions; Ahikar in the Chinese versions; Ahikar in the Japanese versions; addenda and corrigenda to AT 922A and 981.